

## 富松の鬼「茨木童子」のプロフィール

茨木童子（いばらきどうじ）は、平安時代に大江山を本拠に京都を荒らし回ったとされる「鬼」の一人。酒吞童子（しゅてんどうじ）の最も重要な家来であった。出生地には、摂津国（大阪府茨木市水尾、または兵庫県尼崎市富松）という説と、越後国（新潟県長岡市の軽井沢集落）という説がある。生まれた頃から歯が生え揃っていた、巨体であったなど周囲から恐れられ、鬼と化した後は酒吞童子と出会い舎弟となり、共に京を目指した。酒吞童子一味は大江山（丹波国にあったとされるが、現在の京都市と亀岡市の境にある大枝山という説もある）を拠点にし、京の貴族の子女を誘拐するなど乱暴狼藉をはたらいたが、源頼光と4人の家臣たち（頼光四天王）によって滅ぼされたという。しかし茨木童子は逃げ延びたとされ、その後も頼光四天王の一人である渡辺綱と一条戻橋や羅生門で戦った故事が後世の説話集や能、謡曲、歌舞伎などで語り継がれている。



1701年刊行の『摂陽群談』では、摂津国の富松の里（現・兵庫県尼崎市）で生まれ、茨木の里（茨木市）に産着のまま捨てられていたところを酒吞童子に拾われ茨木の名をつけて養われたとある。また『摂陽研説』では、茨木童子は川邊郡留松村（富松と同じく尼崎市の一部）の土民の子であったが、生まれながらに牙が生え、髪が長く、眼光があつて成人以上に力があつたので、一族はこの子を怖れて島下郡茨木村の辺りに捨て、酒吞童子に拾われたという。

酒吞童子の一味による被害があまりにも大きく、源頼光が鬼退治に行くこととなり、配下の頼光四天王（渡辺綱・坂田金時・碓井貞光・卜部季武）や友人の藤原保昌ら、総勢五十数名とともに大江山に向かった。山伏の姿になった一行はさまざまな人々の助けを得ながら、一晩の宿を求める振りをして酒吞童子の本拠にはいることに成功した。その晩は酒宴が盛り上がり、深夜、酔って動かなくなった酒吞童子の一味の鬼たちを頼光らは残らず退治した。ただし、茨木童子のみは渡辺綱と戦っていたところ、酒吞童子の討たれるのを見てこれはかなわないと退却し、唯一逃げるのに成功したという。

茨木童子とともに京都を荒らした大鬼、酒吞童子だが、実は彼らの関係も様々な諸説がある。その諸説の中に、実は茨木童子は“男の鬼ではなく、女の鬼だった”という説があり、または酒吞童子の息子、はては彼の恋人だったという説も伝わっている。そして、しばらくしてから酒吞童子と茨木童子は互いの存在を知り、共に都を目指すようになったといわれている。

富松の鬼では、「茨木童子は、生まれながらに恐ろしい容貌のため、両親は思案の末この子を捨てたところ、酒吞童子に拾われ家来になった」とされます。そして「その後、両親が病気になったことを知った茨木童子は、親元を見舞いに行った」のです。ですから富松の鬼の茨木童子は、親孝行で心優しい一面もあったようです。

(出典:Wikipedia)